

コリント人への手紙第二 第2章 15節

「私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。」

梅雨の季節の始まりには、それまで咲き誇っていた薔薇から紫陽花があちらこちらの垣根に顔をのぞかせます。白、赤、ピンク、青、淡い青と多彩な花をつけ雨に、曇りに、陽の下に咲いています。同じ花でも、時の経過とともに色が変化し、異なった雰囲気あたりにもたらしめます。花はこの季節を謳歌しながら、通りを行き交う人々を楽しませます。梅雨時ところに流れる一服の冷水となります。鬱陶しさを解消する紫陽花の佇まいです。

花は花として、定められた恵みの季節を過ごし、定められた場所で咲き、定めの時を刻むばかりです。神の定めに在ることが、行き交う人々への贈り物となります。花自身が咲く華やかさを知って、人前に在るとは思えない。ただ、あるがままに、そこに在るだけです。

私たちもキリストの恵みに在って、定められた場所と、ときに、人々の中でキリストのかおりとされます。それが、神の前のかぐわしいキリストのかおりなのです。自分たちがキリストのかおりを放っていると知っているわけではない。御前でかぐわしいキリストがかおります。